

# 日本遺産にダブル認定

「会津の三十三観音めぐり」（会津 17 市町村）と  
「未来を拓いた『一本の水路』」（郡山市・猪苗代町）  
の 2 件が日本遺産に認定されました。

写真は町ホームページ「フォトライブラリー」より



# 日本遺産第2弾認定

文化庁は「日本遺産」認定の第2弾を発表し、福島県からは仏都会津をテーマとした「会津の三十三観音めぐり」と安積疎水をテーマとした『未来を拓いた『一本の水路』が認定されました。いずれも猪苗代町に関連するストーリーで、今後、地域の活性化や観光客の増加が期待されます。



## 日本遺産とは？

日本遺産は文化庁が平成27年度に創設した制度で、地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として認定するものです。

ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形のさまざまな文化財群を総合的に活用する取り組みが支援されます。

文化庁では、日本遺産を平成27年度に18件、平成28年度に19件認定しました。今後、平成32年までに100件程度が認定される予定です。

## 世界遺産や指定文化財との違い

世界遺産登録や文化財指定は、いずれも登録・指定される

文化財（文化遺産）の価値付けを行い、保護を担保することを目的とするものです。

一方、日本遺産は、既存の文化財の価値付けや保全のための新たな規制を図ることを目的としたものではなく、地域に点在する遺産を「面」として活用し、発信することで、地域活性化を図ることを目的としています。

## 認定された日本遺産の概要を紹介します

「会津の三十三観音めぐり」巡礼を通して観た往時の会津の文化」

東北で最も早く仏教文化が開花した会津は、平安初期から中世、近世の仏像や寺院が今も多く残り「仏都会津」とも呼ばれています。その中でも、三十三



応永十八年（1411）に建立された観音寺宝篋印塔



オランダ人技師ファン・ドールン像



現在の十六橋水門（戸ノ口）。湖岸地区の氾濫を防ぐ治水の役割も果たす

観音巡りは、古来のおおらかな信仰の姿を今に残し、広く会津の人々に親しまれています。会津藩祖、名君保科正之公が定めた会津三十三観音巡りは、広く領民に受け入れられ、後にさまざまな三十三観音がつくられました。三十三観音を巡った道を、道中の宿場や門前町で一

服しながらたどることで、往時の会津の人々のおおらかな信仰と娯楽を追体験することができます。

町の関係文化財としては、「猪苗代三十三観音」、観音寺宝篋印塔（県指定重要文化財）、安積寺・銅造阿弥陀如来立像（国指定重要美術品）が日本遺産認

定に関する構成文化財となっています。

なお、「猪苗代三十三観音」の第1番札所になっている観音寺の聖観音座像は、寺の本尊となっていますが、毎年、観音寺川桜まつりの開催に合わせて、一般の人にも公開されています。

「未来を拓いた『一本の水路』―大久保利通―最期の夢」と開拓者の軌跡郡山・猪苗代」

明治維新後、武士の救済と、新産業による近代化を進めるため、安積地方の開拓に並々ならぬ思いを抱いていた大久保利通。彼の思いは、猪苗代湖より水を引く「安積開拓・安積疎水開さく事業」で実現しました。

安積疎水成功の鍵は、猪苗代湖の水位を調整する十六橋水門（近代化産業遺産）の建設にありました。オランダ人技師ファン・ドールンの監修のもと、近代土木技術が国内で初めて疏水の設計に導入されました。

この事業により、猪苗代湖の水を治め、米や鯉などの食文化を一層豊かにし、さらには水力発電による紡績などの新たな産業の発展をもたらしました。

町の関係文化財としては、「猪苗代湖」および「十六橋水門」が日本遺産認定に関する構成文化財となっています。

町では今後、関係者と協議しながら、地域の歴史や文化の理解を深める取り組み、日本遺産のブランド力を活用した観光振興などを進めていきます。



観音寺聖観音座像